

大学院へ進学する者、しない者

山下清海

生命環境科学研究科教授

私は、2年あまり前、母校である筑波大学に、21年ぶりに戻ってきた。キャンパス内の並木が大きくなったこと、新しい研究棟の研究室がガラス温室のように、廊下から内部が丸見えであることをはじめ、多くの変化に驚いた。そのような変化の一つに、大学院生の増加がある。

私は、学部では東京教育大学、そして大学院では筑波大学に籍を置いたが、最初の2年間は大塚キャンパスで講義が行われた。教育大時代の大学院は、地理学専攻の修士課程の定員は10名、博士課程は5名であった。学部の地理学専攻の定員は30名であった。「地理をやるんだったら教育大」という評判が高く、理学部地学科地理学専攻の学生の中には、将来は地理学者になりたいと思う者が全国から集まっていた。

大学院の入試は、現在の筑波大学大学院地球環境科学専攻の入試に比べるとはるかに難しかった。学部生の中で優秀な者が大学院修士課程に進み、さらにその半数のみが博士課程に合格できた。私が大学院博士課程で学んでいた時、地理学が専門の同学

年生は6人いたが、現在、全員が大学教授になっている。

思い出話的な内容が長くなったが、今の筑波大学大学院の状況はどうだろうか。

学類の学生の中には、研究熱心で、非常に優れた卒論を書き上げる者がいる。往々にして、このような学生は、大学院に進まず名前の知れた企業や官公庁などへ就職してしまうのである。教育大時代に比べ、筑波大生の就職先は幅が広がった。大学教員のポストを得る道が険しい現状を考えると、優秀な学生に対して、就職せずに、ぜひとも大学院に進学したらどうだと説得することに躊躇してしまう。自発的に本人が大学院に行きたい、と言い出してくれればよいが、優秀な学生こそ、将来の自分の道をしっかり考えて就職してしまうのである。

大学院が魅力的でなければ、優れた院生は集まらない。では、院生にとって魅力的な大学院とは何か。現実的な回答を言えば、大学院を修了して早期に大学教員になっている先輩を多く輩出している大学院ということであろう。全国レベルで院生が増加する一方、大学教員ポストは減少している。大学院を担当する教員の課題は重い。

(やました きよみ／人文地理学)

「筑波フォーラム」73号

発行：筑波大学，2006年6月